

# 歴史物語における不即位東宮

—「先坊（前坊）」再考—

福田景道

**要旨** 東宮保明親王早世の悲劇は、皇統の行く末を揺るがし、『後撰集』や『大和物語』の素材となつて流布し、夭折した東宮を意味する「先坊（前坊）」は保明の別称として定着していった。その流れを承けて『源氏物語』の六条御息所の物語や『大鏡』の先坊と太后の物語が形成されたのである。『源氏』『大鏡』両作の影響は後世に広く及び、先坊像を発展させ、『今鏡』の先坊を生み出し、中世新時代に至るまで途絶することはなかった。十三世紀初頭には先坊は明確な形象を獲得し、『浅茅が露』『いはでしのぶ』などの中世王朝物語の世界で安定した存在感をもつて多出するようになったと思われる。同時に、歴史物語の系統では皇位継承史の要諦として枢要な役割を果たし続ける。『大鏡』では先坊の母后として「太后」穩子が皇位継承を主導し、『今鏡』では立坊していない敦文親王が先坊として機能し、『六代勝事記』でも仲恭帝が先坊の扱いを受けて皇統変更を象徴する。これらの伝流を継受して、『増鏡』の先坊邦良親王が造型されたのである。和歌文学、歌物語、作り物語、歴史物語で醸成された先坊が『増鏡』の邦良親王像に結実したとも言える。

【キーワード】 先坊、前坊、歴史物語、大鏡、今鏡、増鏡、六代勝事記、物語、中世王朝物語

## はじめに

歴史物語諸作品において、先（前）の東宮が「先坊」「前坊」と呼ばれることがある。東宮が東宮でなくなるのは帝位に即いた時点であるのが通常なので、先（前）の東宮とは後の天皇にはかならない。東宮経験者は天皇経験者でもあり、後世から回顧する歴史叙述の中では天皇名や院号で呼称されるため、先の東宮と捉えられる人物は原則的に存在し得ないのである。したがって、「先坊」と呼ばれるのは即位しなかった東宮に限られる。死去、廢位、辞退などの異常事態や悲劇的事件によって、先坊称呼で回想される人物が生まれるのである。類語の「先帝」が在位中または讓位直後に死去して院号で呼ばれなかった天皇の呼称として多用されると異なり、「先坊」

の使用例が極端に少ないのもその異常性と例外性に起因しているのである。

歴史物語における不即位東宮、特に「先坊」については拙稿「歴史物語と「先坊」―『大鏡』『今鏡』『増鏡』を中心として―」（『島大國文』第二十五号、平成九年二月。以下「前稿」と略称する）でかつて以下のような私見を提示した。

『大鏡』『今鏡』『増鏡』には、「夭折した東宮」を意味する「先坊」が一人ずつ登場する。まず、『大鏡』の先坊保明親王が、皇位継承史の分岐点に位置付けられ、同時に、『後撰和歌集』『大和物語』の保明親王や『源氏物語』の前坊と連携して物語世界の「先坊」形象を確定する。『今鏡』には立坊していない敦文親王が先坊の役割を果たすが、その系譜上の人間関係において

『大鏡』の保明を踏襲する。『増鏡』の先坊邦良親王は、明確に『大鏡』の保明に重ね合わされている。こうして鏡物系歴史物語三作品において保明親王に基づく先坊三人が存在感を示すのである。

このような「先坊保明」のイメージは、『後撰集』や『大和物語』に源流をもちつつ『大鏡』において完成し、後続の『今鏡』『増鏡』に継受されていたものと考えられる。また、そのイメージは虚構の『源氏物語』世界とも接触し、『いはでしのぶ』『浅茅が露』などの作り物語にも大きな影響を与えた。これらの諸作品に「先坊」が必ず一人しか登場しないのは、保明の影響の根強さに起因するに違いない。夭折した東宮である『大鏡』の慶頼王、『今鏡』の実仁親王、『増鏡』の康仁親王が先坊と呼ばれることがないのは、保明との共通性の欠如に基づくと考えられる。複数の該当者が存在し得る「先帝」とは対照的に、「先坊」は保明親王と不可分のものとして歴史物語史を貫流するのである。

以上のような「前稿」を踏まえて、本稿では、作り物語や和歌文学との接点にも留意して歴史物語の基幹構想と先坊との関わりを明らかにしたい。したがって、作品本文の引用箇所とそれに伴う論究部分などで「前稿」と重複するところがある。

なお、「センバウ」は「先坊」とも「前坊」とも表記されるが、本稿では引用文を除き、「先坊」に統一する<sup>(2)</sup>。

## I 『大鏡』の先坊保明親王

まず『大鏡』における「先坊」の実態を確認する。

①御母后（穩子）、延喜三年癸亥、前坊（保明親王）をうみたまつらせたまふ。御年十九。<sup>(3)</sup>（『村上帝紀』三九頁）

②后にたちたまふ日は、先坊（保明親王）の御ことを、宮のうちにゆゆしがりて申し出づる人もなかりけるに、かの御乳母子に大輔の君と言ひける女房の、かくよみて出だしける、

わびぬれば今はとものを思へども心に似ぬは涙なりけり

また、御法事はてて、人々まかり出づる日も、かくこそはよまれたり

けれ。

今はとてみ山  
を出づる郭公い  
づれの里に鳴か  
むとすらむ

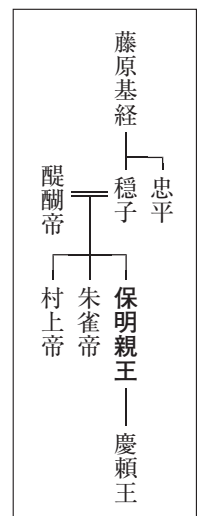
五月のことにはべりけり。げにいかにとおぼゆるふしぶし、末の世まで伝ふるばかりのこと言ひおく人、優にはべりかし。前の東宮（保明）におくれたてまつりて、かぎりなく嘆かせたまふ同年、朱雀院生まれたまひ、我、后にたたせたまひけむこそ、さまざま、御嘆き御よろこび、かきませたる心地つかうまつれ。世の太后とこれを申す。（『村上帝紀』四〇頁）

③先坊（保明親王）に御息所まゐりたまふこと、本院のおとど（時平）の御女（仁善子）具して三四人なり。本院のは、うせたまひにき。中将の御息所（忠平女貴子）と聞こえし、後は重明の式部卿の北の方にて、斎宮女御の御母にて、そもうせたまひにき。いとやさしくおはせし。先坊を恋ひかなしびたてまつりたまひ、大輔なむ、夢に見たてまつりたると聞きて、よみておくりたまへる、

時の間も慰めつらむ君はさは夢にだに見ぬ我ぞかなしき  
御返りごと、大輔、  
恋しさの慰むべくもあらざりき夢のうちにも夢と見しかば

いま一人の御息所は、玄上の宰相の女にや。（『時平伝』八四・八五頁）  
④女君一所（貴子）は、先坊（保明親王）の御息所にておはしましき。（『忠平伝』九四頁）

以上のように『大鏡』には四箇所に「先坊（前坊）」五例と同義の「前の東宮」一例が確認できる。そのすべてが保明親王個人の別称として用いられていることが注目される。『大鏡』の主要な叙述期間の範囲内の不即位の東宮には敦明親王と慶頼王も該当するが先坊と称されることはない。特に、保明の遺児慶頼は、夭折した東宮として、父と同様に先坊の称に相応しく、保明の悲運とも連鎖して先坊と認識された事例も確認できる。それにもかかわらず、慶頼が先坊として扱われないところに、『大鏡』において先坊が保明



系図1 『大鏡』の先坊

に独占されることの特異性が露呈すると思われる。

さて、「前稿」では、『大鏡』の先坊が保明親王固有の名称として確立する様を①④によって指摘したのであるが、本稿ではそれと『大鏡』全体の構想との関係に論及する。そのためにまず『大和物語』の先坊に注目しておく。第五段に『大鏡』②の同話が載る。

前坊の君（保明親王）うせたまひにければ、大輔かぎりなく悲しくのみおぼゆるに、後の宮（穩子）、后に立ちたまふ日になりければ、ゆゆしとて隠しけり。さりければよみていだしける。<sup>6</sup>

わびぬればいまはともを思へども心にぬは涙なりけり<sup>6</sup>

『大和物語』の文脈は「心に似ぬは涙なりけり」の歌意に収束し、保明先坊の死を哀悼するところに主題があるのは疑えない。穩子の立后もその悲しみを増幅する効果をもたらすように思われる。晴れの場ゆえに悲しみを遮蔽しなければならぬ穩子の心意と、それを補償するかのよう悲しみを一身に引き受ける大輔の深情とが最後の一首に昇華されるようである。一方、『大鏡』では、同様の情感が内包された上で、悲嘆だけでなく喜びも併存した実状に筆が及んで終演される。先坊の悲劇は朱雀朝の新生と表裏一体のものとして位置付けられている。両作品の重心の相違は明らかである。ひたすらに哀傷が強調されるだけで、皇位継承動向の片鱗さえ認められない『大和物語』の歌語りと対比すると、『大鏡』の先坊物語の方向性が顕著になるであろう。

さらに『大鏡』については、この一連の悲話に「世の太后とこれを申す」の一句が付されている点も軽視できない。穩子は、天皇家と摂関家の紐帯となつて『大鏡』の宮廷世界を領導する存在である。ここで保明先坊から朱雀院への皇嗣変更に関わつた穩子は、後に朱雀院に讓位を促して村上帝への皇位移動を主導する<sup>7</sup>。村上皇統を正統に定めた行為と言つてよい。このような「太后」の属性は、「中后」安子、東三条院詮子、上東門院彰子へと引き継がれて『大鏡』の基調を形成する。その始点に立つのが先坊物語なのである。また、この時代は『大鏡』の中心である道長栄華の始原かつ先行型の意味をもつ忠平時代の淵源にも相当する<sup>8</sup>。先坊と太后の物語は『大鏡』の大臣列伝の中心軸、皇位継承史の岐路として重要視されなければならない。

『後撰和歌集』の詞書でも保明親王が「先坊（前坊）」と呼ばれるが、いず

れも夭折を悼むものである<sup>9</sup>。『大鏡』の先坊は、保明親王に直結する意味で当時の実態と異ならないが、悲劇に終始することなく皇位継承史の展開に寄与することで特異であり、後述する歴史物語の先坊の源流となると考えられる。なお、『源氏物語』の先坊は、政治的に機能する点で『大鏡』の先蹤となると思われるが、本稿では歴史物語の本質としての皇位継承（世継）に限定的に注目する。

## II 『今鏡』の「先坊」と不即位東宮

『今鏡』には、「先坊」が二例ある。

⑤この帝（堀河帝）の御母（賢子）、（中略）承保元年六月二十日、后にたち給ふ。御齡十八におはしましき。十二月二十六日、前坊（敦文親王）生みたてまつらせ給ふ。（すべらぎの中第二「所々の御寺」、上三三三頁）

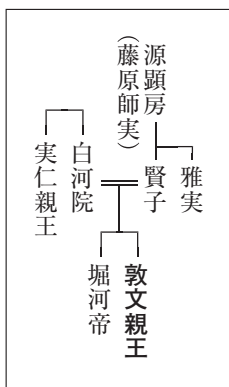
⑥六条の右の大臣（源顕房）の君達は、まづ堀河の帝の御母中宮（賢子）、その御腹に、前坊（敦文親王）と堀河の帝と男宮生みたてまつらせ給へり。（村上源氏第七「根合」、下八二頁）

『今鏡』の敦文親王は、先坊以外の呼称をもたない。白河帝中宮賢子の儲けた皇子の一人であることが分かるだけで、先坊と呼ばれるに至つた事情は一切語られない。白河朝頃に即位する前に夭折した東宮が存在したことを窺知させるに過ぎないのが『今鏡』の叙述なのである。

ところが、敦文親王は東宮ではなかった。白河帝待望の男御子として皇位継承が約束されていた感はあるが立坊しないままに四歳で早世してしまつたのである。『今鏡』の「前坊」記述は事実と反する。

海野泰男は注釈の中で「なお前坊とあるのは、敦文親王の立太子のことはなかつたので、『今鏡』の誤りである。

白河天皇の時の皇太子は、皇弟実仁親王で、この親王も応徳二年十一月八日、十五歳で薨じている（『扶桑略記』）ので、それとの混同があつたか」とこの部分を解釈する。<sup>13</sup>「前坊」



系図2 『今鏡』の先坊

表記への初めての論及として注目される。<sup>14</sup>

しかし、『今鏡』は混同しているであろうか。

敦文親王が立坊しなかったのは、すでに実仁親王（白河帝の異母弟）が東宮位にあったからである。延久四年（一〇七二）に白河帝即位にあたって二歳の実仁親王が皇太弟となり、応徳二年（一〇八五）痲瘡によって十五歳で夭折している。甥に当たる敦文が誕生したのは実仁東宮三歳の冬で、承保四年（一〇七七）に四歳で敦文が早世した時、依然として実仁は皇太弟のままであった。

すなわち、実仁の東宮在位は敦文の全生涯を覆い、十四年間の長期に及ぶものであり、看過されるほど軽微なものとは思われない。実仁が夭折した時点で東宮であったのは明確で、疑いのない先坊であった。ところが、『今鏡』では実仁が先坊と見なされず、先坊ではない敦文が先坊と称される。皇位継承が重視される歴史物語の記載としては異例と言わなければならぬ。

先行の『栄花物語』続編には、

東宮（実仁）・三の宮（輔仁）も、御年のほどよりはものをうつつくしうのたまはせ、あさましくおとなしくぞおはしませしける。この若宮（敦文）もいとめでたくおはしませば、殿の上（師実北の方）つと抱きたてまつらせたまへり。上（白河帝）も片時立ちのかせたまはず、<sup>15</sup>（三・四七九頁）

と、「東宮」実仁親王と「若宮」敦文親王が同一記事に書き分けられ、両者が別人であることが明示される。系譜や血統に留意して端然と構成され、『栄花物語』の後継者を自認する『今鏡』の特色<sup>16</sup>から見れば、東宮位が誤認されたとはいえ難い。

また、離れた二箇所（⑤⑥）で等しく敦文が「前坊」と直接的に呼ばれているので誤写や誤脱を予想することも難しい。『今鏡』の敦文親王が先坊として扱われるのには、意味があると考えべきかもしれない。

この問題について、前稿では、敦文親王が実質的な意味での東宮と見なされていたであろうことを諸書に基づいて推察し、歴史物語における地位や身分が現実よりもゆるやかに捉えられている事例によってそれを傍証した上で、『今鏡』世界では敦文は『大鏡』の保明親王に酷似して先坊と呼ばれるに相応しいと解いた。系譜（系図）が重視される『今鏡』の歴史叙述で

は、后腹の第一皇子であり、実弟が即位し、外伯叔父に太政大臣がいたという点で、敦文は『大鏡』の先坊の再来だったのである。また、母后が先坊を生むという文趣（⑤）が『大鏡』のそれ（①）に符合する点も軽視できない。母后賢子は源氏の顕房女であったが、撰関家の藤原師実の養女として入内した点でも『大鏡』の穩子に近似する。

敦文が夭折して先坊にならなければ、堀河帝の在位も堀河皇統の継続も実現しなかった可能性が高い点も看過できない。国母を介して外家を後見として確立する皇位継承史を基軸とする『今鏡』にあつては、先坊の出現は皇位継承過程の岐路となる点で重要であった。その点では実仁親王の落命も堀河朝成立にとつては、敦文早世と同様に重要であったが、系譜（系図）において『大鏡』を継受する敦文が『今鏡』の先坊に定位されたものと考えられる。『今鏡』成立に近い時期に成立した『続詞花和歌集』に記される「先坊」にも注目しなければならない。詞書に行尊大僧正が先坊を悼む文辞がある。

前坊かくれさせたまひて御はてすぎて、人々ゆきわかれるあした、  
ひたちの乳母（の）もとにつかはしける 前大僧正行尊

おもひきや春のみや人なのみして花よりさきにちらむものとは（巻第十九「哀傷」三三七）<sup>17</sup>

行尊は、実仁親王の実母である女御源基子の兄弟であるので、この「前坊」に実仁が該当するのは明白である。そのことは、『今鏡』に同歌が収載されていて確認できる。東宮実仁が十五歳で死去した記事に続いて

平等院の僧正（行尊）は女御（基子）の御兄なれば、東宮（実仁）の御忌にこもり給ひて、御果過ぎて、人々散りけるに、常陸の乳母におくり給ふと聞え侍りし、

思ひきや春の宮人名のみして花よりさきに散らむものとは（下二三〇頁）

と、ほぼ同一の挿話が記される。<sup>18</sup>両書の引承関係は即断できないが、藤原清輔が勅撰集たらんことを期して永萬元年（一一六五）頃に撰進した『続詞花集』を、和歌に精通する『今鏡』作者が嘉応二年（一一七〇）頃に知らなかったとは考え難い。やはり、『今鏡』では故意に実仁は先坊と見なされず、系譜に基づいて敦文が作品内唯一の先坊に選定されたと判断できるであろう。

作品を異にしつつも実仁と敦文がともに先坊と呼ばれる事実は海野の混同説にも繋がるように思われるが、後出の『今鏡』に敦文が実名等で呼ばれることなく、ひたすらに先坊である点に注目したい。<sup>19)</sup>同時に、『今鏡』が実仁ではなく敦文を先坊に選んだ事実、実仁を先坊と呼ばなかったことも軽視できないであろう。

『今鏡』では、実仁親王の死没に際しての近縁者の哀悼が描かれる。『大鏡』の保明親王追悼を想起させるような筆致である。しかしながらその際の実仁は「東宮」であって「先坊」ではない。一方、生前も死も死後もまったく描かれない敦文が先坊以外で呼ばれないところに歴史物語としての『今鏡』の特色が顕現すると思われる。

### Ⅲ 『増鏡』の「先坊」

『増鏡』には先坊の用例が多い。

⑦いにしへの基経の大臣の御女（穩子）、延喜の御代の大后宮、朱雀・村上<sup>20)</sup>の二代の国母にてをはせしも、初め出でき給ひて殊になしうし給し前坊（保明親王）にをくれ聞え給て、御命のうちは、絶えぬ御歎き尽させざりき。（第十「老のなみ」、三六九頁）。

⑧有忠の中納言、先坊（邦良親王）の御使ひにて東に下りにし、いつしかと思ふさまならん事をのみ待ちきこえつ、踐祚の御使ひの宮に参らんと同じやうに上らんとて、いまだかしこにものせられつるに、かくあやなきことの出で来ぬれば、いみじともさらなり。三月三十日、やがてかしこにて頭おろす。心のうちさこそはと悲し。

大かたの春の別のほかに又我世つきぬる今日のくれかな

（中略）卯月の末つかた、夏木だち心よげに茂りわたれるも、うらやましくながめさせたまふ。あか月がた、ほと、ぎすの鳴きわたるも、「いかに知りてか」と、御涙ももよをしなり。

もろともに聞かまし物を郭公まくらならべし昔なりせば（第十四「春の別れ」、四三三～四三四頁）

⑨八月になりて、陽徳門院（嬬子、後深草院三女、新東宮の従祖母）の土

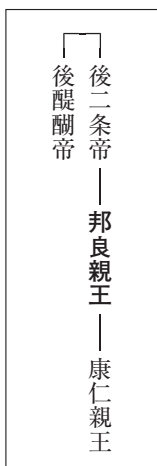
御門東の洞院殿へ行啓はじめあり。先坊（邦良親王）の宮は鷹司なれば、まぢかき程に、世のをとなひきこしめす入道宮（崇明門院祿子、先坊妃）・女院（永嘉門院瑞子、後宇多院猶子）などの御心の中、いとかなし。（第十四「春の別れ」、四三三頁）

⑩前坊（邦良親王）のはじめつかた、中院の内大臣通重の女まいいり給て、十八月にて若宮生まれ給へりしとかや、やがて御子も母宮す所も失せ給にしかば、いみじうあさましき事にいひ騒ぎし程に、又其後、このとまり給へる入道の宮（祿子）まいいり給へりしも、十七月ばかりにや、たゞならずおはしまして、すでに御気色ありとて、宮の中たち騒ぐ程に、たゞゆく／＼と水のみ出でさせ給て、昔の弘徽殿の女御（承香殿女御元子）の、太秦にてありけんやうにてやみき。折ふし、賀茂の祭りの頃にて、春宮使もとまりなどして、さやうのをり／＼、人の口さがなさ、せめても、先坊（邦良）の御方さまの事を、おとしめさまにいひなやましし人々／＼も、この頃ぞ、又かくまさる例もありけりと、はしたなく思ひあはせける。（第十五「むら時雨」、四三九～四四〇頁）

⑪今年（元徳元年）いかなるにか、しはぶきやみ流行りて、人多く失せ給中に、伏見院の御母玄輝門院、前坊（邦良親王）の御母代の永嘉門院（瑞子）、近衛大北政所など、やんごとなきかぎり、うち続きかくれ給ぬれば、こ、かしこの御法事しげくて、いとあはれなり。（第十五「むら時雨」、四四〇頁）

⑫かゝるにつけては、一御族のみ、今はわく方なく定まり給べきかと、世の人も思ひきこゆる程に、龜山院の御流れの絶ゆべきにはあらずとにや、先坊（邦良親王）の一の宮（康仁）を太子に立てまつる。御めとの雅藤の宰相の法性寺の家にわたらせ給へるを、土御門高倉の先坊の御跡へ入たてまつりて、十一月八日坊に定まり給。今は思絶へぬる心しつるに、いとめでたし。松が浦島に年経ぬる入道の宮（祿子）も、御親の心ちにておはします

べければ、太上天皇になすらへて崇明門院ときこゆ。よろづ斧の柄



系図3 『増鏡』の先坊

朽ちにし昔を改めたる宮のうち也。(第十五「むら時雨」、四五五頁)

以上のように、『増鏡』には、六箇所に先坊が姿を現す。このうち、⑦は『大鏡』の取用である。後半「初め出で給ひて殊にかなしうし給し前坊にをくれ聞え給て、御命のうちは、絶えぬ御歎き尺きせざりき」の傍線部分は、『大鏡』②中の「前の東宮におくれたてまつりて、かぎりなく嘆かせたまふ」を明白に踏襲する。前半の「いにしへの基経の大臣の御女、延喜の御代の大后宮、朱雀・村上の二代の国母にてをはせしも」は、『大鏡』の「このおとど(基経)の御女(穩子)、醍醐の御時の后、朱雀院并村上二代の御母后におはします」(「基経伝」六八・六九頁)に一致し、『増鏡』中の「大后」は『大鏡』②の末尾「世の大后とこれを申す」を受け継ぐものである<sup>21)</sup>。

⑧～⑫では、踐祚を目前に病死した東宮邦良親王が「先坊」と称されている。「後二条院の一の御子」としての立坊(第十三「秋のみ山」四一三頁)以来、一律に「春宮」と呼称されていた同親王は、これを境に画然と「先坊」に転ずるのである<sup>22)</sup>。これは作品世界の「現在」が物語世界の時間の進行とともに移動する『増鏡』の叙述方法に基づく<sup>23)</sup>。邦良東宮時代には先坊になることが予見できないので生前の邦良を先坊と見なすことは許されない。それにもかかわらず、邦良は歴史物語中で最も頻繁に先坊と呼ばれるのは、先坊の重要性を投影するようである。

⑧の悼歌「もろともに聞かまし物を郭公まくらならべし昔なりせば」のほととぎすに託する哀調は、『大鏡』②の「今はとてみ山を出づる郭公いづれの里に鳴かむとすらむ」と共鳴するであろうことは「前稿」で述べた。

こうして⑦⑧において『増鏡』の先坊は『大鏡』を踏まえて明確な形象を獲得する。次に⑨～⑫で悲嘆の継続と周辺への影響が活写された上で、⑫の先坊の遺児康仁親王立坊が導き出される。明と暗が交替を繰り返す『増鏡』の基幹構想<sup>24)</sup>に見合うものであるが、保明没後の慶頼王立坊との符合に読者の思いが至るのを禁じることはできない。康仁東宮の先例として慶頼の運命が重ね合わされるであろう<sup>25)</sup>。

『増鏡』の先坊は歴史物語史の中にあり、皇位継承史の一部を占めることも看過できない。邦良、康仁の失墜によって後二条皇統が断絶し、『増鏡』擱筆時点に至って、傍流であったはずの後醍醐帝が正統に転じたと解釈でき

るからである。この点で、『増鏡』は『大鏡』と『今鏡』の後継作品と認定できる。なお、「前稿」で既説したが、『増鏡』の先坊も「夭折した東宮」を意味することを付言しておく<sup>26)</sup>。

次に、『増鏡』生成の時代に、邦良親王の通称として先坊が用いられていたことにも言及しなければならない。

早期の例としては、康永三・四年(一三四四・一三四五)頃の成立とされる『藤葉和歌集』巻第三「秋歌」二二八の作者名「読人しらす」に「前坊御製」と傍記されている<sup>27)</sup>。ほぼ同時期の『兼好法師集』の詞書にも「先坊御時」「前坊御まへに」と記され、生前の邦良親王が歌集編纂当時の通称に従って先坊と表記される傾向が看取できる。約二十年後の歌集では、邦良東宮急死を悼む詠歌の詞書に「前坊かくれさせ給」という定型が生まれる。

前坊かくれさせ給ひし後、六条中納言世をのがれて一切経谷にすま  
れ侍りしに、神無月の比たづねまかりて歌よみ侍りしに、庭落葉  
庭の面によもの木のはをさそひきて色の千種に山風ぞふく川水を

〔草庵和歌集〕巻第九「雑歌」一一八一

前坊かくれさせ給ひし比よませ給うける 寿成門院  
露消えし草のゆかりをたづぬればむなしき野べに秋風ぞ吹く

〔新拾遺和歌集〕巻第十「哀傷歌」八八八

死を意味する述語(「隠れる」)の主語に死後に成立するはずの「前坊」が用いられるということから、この時点で先坊が邦良の通称になっていると推量できる。これらは十四世紀半ばの現象である<sup>28)</sup>。さらにその二十年後には、『増鏡』と同一の悼歌が勅撰集『新後拾遺和歌集』に収められ<sup>29)</sup>、『増鏡』と同一内容の詞書の中で邦良親王は「前坊」と記される。

前坊うせたまひぬと、あづまにてつたへききて、三月  
つごもりかしらおろし侍りける時に、思ひつづけける

前中納言有忠

大かたの春のわかれの外にまた我が世もつくるけふぞかなしき

〔新後拾遺和歌集〕巻第十七「雑歌下」一四四五  
『藤葉集』『兼好法師集』『草庵集』『新拾遺集』『新後拾遺集』は十四世紀半ばの約四十年間の成立で、この間に邦良親王は先坊と認識されるように

なつたと思われる。そして、この十四世紀中葉は『増鏡』の成立時期に相当するのである。<sup>30</sup>これらの歌集と『増鏡』との直接的関係は不明であるが、和歌詞書の「前坊」「先坊」表現と『増鏡』の先坊は無縁ではないであろう。

邦良親王の悲劇は、和歌文学の世界では、保明親王の運命と重ね合わせられ、先坊名辞が通用していた（通用するに至った経緯は次節以降に示す）。

『増鏡』はこの流れに中にある。王朝的伝統を忠実に継承したと考えるべきであろう。既存の歌語り、歌集、作り物語の先坊形象を吸収し、『大鏡』の先坊保明親王像を明瞭に再現して『増鏡』の邦良親王は造型されている。その上で、先坊の悲劇は後醍醐帝皇統確立の要件になり、『大鏡』等と同様に皇位継承史の一翼を担うのである。<sup>31</sup>

#### IV 中世歴史物語としての『六代勝事記』

『六代勝事記』は中世歴史物語の範疇に属し、王朝的な純正歴史物語である『大鏡』や『今鏡』とは、本質を異にする。復古的擬古的な『増鏡』とも乖離する点が多い。

私見によれば、皇位継承史（「世継」）を基軸とする文芸的歴史叙述を「歴史物語」と呼んで一括することが適切で、それらを(1)正統歴史物語（『栄花物語』『大鏡』『今鏡』等）、(2)中世歴史物語（前期：『水鏡』『秋津島物語』『六代勝事記』『五代帝王物語』、後期：『保曆間記』『梅松論』『神明鏡』等）、(3)増鏡系歴史物語（『増鏡』『池の藻屑』『月のゆくへ』等）のように分類できる。<sup>32</sup>

先坊は、(1)の『大鏡』『今鏡』、(3)の『増鏡』に存し、それぞれの特性とその時代については論究したが、(2)の『六代勝事記』にも先坊の名が見られる。

- ⑬同（承久三年）七月廿日。新院（順徳院）を佐渡国へうつしたてまつる。女房二人、殿上人二人ばかりにて、夜をこめて都をいでさせ給ふ。御母修明門院（重子）・中宮（立子）・一品のみや（昇子）・前坊（仲恭帝）などの御事おぼしめきおくに、なみだとまらず。<sup>33</sup>（九一頁）

仲恭帝が「前坊」と記されている。これが作品中唯一の同帝の称呼である。「仲恭」という諡号が送られたのが明治時代になってからで、それまでは後

廢帝・九条廢帝などと呼ばれて不安定であり、しかも即位礼・大嘗祭実施前の廢位で「半帝」とも見なされていた実状を鑑みれば、通常の帝位と同一視できなかったとは考えられる。しかし、「前坊」と呼ぶのは踐祚さえも認めないようで極端すぎる扱いと言わなければならぬ。

また、仲恭帝が廢帝である点も無視できない。十七歳で夭折しているが、廢位の十三年後のことである。

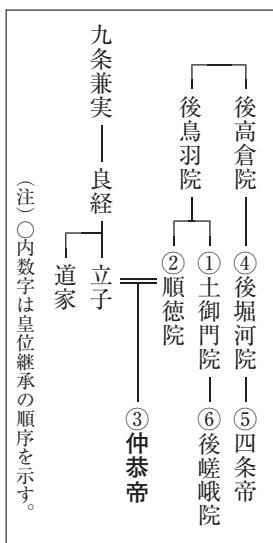
前節までに取り上げた先坊はすべて夭折して即位できなかった東宮であつて、存命のままに廢された「廢坊」は皆無であつた。先坊とは夭折した東宮を意味すると通常は理解されている。<sup>34</sup>『源氏物語』に関しては廢坊説があるが、「故前坊」「故宮」と表現されていて、先坊が固有名詞的に用いられるまでは至っていないと解されることもあり、ここでは慮外する。<sup>35</sup>

こうして、『六代勝事記』の先坊は歴史物語や歌物語のそれとは隔絶するのである。「先」にも「坊」にも該当しない。

別稿において、この点に注目し、先坊を指標にして中世歴史物語の特性を提示したことがある。すなわち、保明親王への哀悼を継受し、夭折した東宮としての先坊像を保持する点で、平安時代の作り物語と中世王朝物語とに連続性が認められるのに対して、『六代勝事記』の先坊は先行の王朝歴史物語（『大鏡』『今鏡』等）と乖離すると見なしたのである。<sup>36</sup>これが(1)正統歴史物語と(2)中世歴史物語を区分する一要因になる。

しかしながら、歴史物語の本旨、皇位継承史的側面に注目すると、『六代勝事記』は特殊でも例外でもない。仲恭帝廢位の悲劇は、後鳥羽院皇統から後高倉院皇統への劇的変更を決定するものであり、将来、後鳥羽院皇統の正統が順徳院系から土御門院系に移動することの端緒ともなる重要な分岐点なのである。『六代勝事記』でこの点が着目されることはないが、歴史物語作品群の一つとして見れば相応の意味は認められる。

さて、中世歴史物語



系図4 『六代勝事記』の先坊

始発の時期に、和歌文学の系統では先坊のイメージが定着しつつあったようである。その一徴証を示す。

『六代勝事記』と同時期に藤原定家が選んだ『定家八代抄』（巻第七「賀歌」五八四）に先坊が現れる。

延喜御時前坊むまれ給へりける時 因香朝臣

峰たかきかすがの山に出づる日はくもる時なくてらすべらなり

保明親王誕生に際しての祝意の一首である。『古今集』の詞書「春宮のむまれたまへりける時にまゐりてよめる」（巻第七「賀歌」二二六四）の「春宮」が「前坊」に変えられている。『定家八代抄』には先坊がもう一例見られる。『後撰集』詞書の「先坊うせたまひての春、大輔につかはしける」「おなじ年の秋」（巻第二十慶賀哀傷一四〇六・一四〇八）が「前坊かくれさせ給ひにける秋」（巻第八「哀傷歌」六九五）となつて受け継がれているのである。先坊の心象が保明親王に定着しつつあるようである。

同じ定家撰の『物語二百番歌合』（元久三年へ一二〇六）。寛喜三年（一二三二）補訂）には『源氏物語』より「前坊御息所」（六条御息所）の歌が六首採られている。この頃には『源氏物語』の「前坊」の呼称が定着していて、その後の中世王朝物語の先坊に繋がるのものと推断される。

十三世紀初頭の頃、先坊は一転機を迎えていたのかもしれない。保明親王の故事、『源氏物語』、『大鏡』等のイメージが一体化して、明確で固定的安定的な先坊像が成立し、並行して『大鏡』や『今鏡』の流れを承けて皇位継承史の分岐に先坊が作用する例も見られるようになったと考えられる。それは次の中世王朝物語の先坊にも結びつく。

## V 中世王朝物語の先坊

中世王朝物語『浅茅が露』には、先坊の遺児の悲劇が描出される。齋宮に卜定されながら母を失って運命が急転し、薄幸の末路をたどる姫宮が登場するのである。

齋宮も降りさせ給ひぬれば、御代はりには、先坊の姫宮居させ給へるに、母御息所、にはかにわづらひて隠れさせ給ひぬれば、さるべき姫宮

おはしまさぬによりて、院の姫宮立たせ給ふに、（一八一頁）

先坊のおはします所は、三条高倉なれば、這ひわたる程なり。御息所は、御心深く心にくき人に言はれ給ひしかば、（一一二頁）

先坊の、世にすぐれ給へりし琴の御琴におぼえて、（同）

先坊の母后、故太政大臣の御妹におはしまししかば、常盤の院と一つ腹なれば、この大殿もうち続き頼みかはし給へる御末なり。先坊の領じ給ひし所、この院をはじめて、さまざま御調度ども、また見譲るべき方おはせず、親しき御ゆかりもいづ方にもおはせず、心細き御さまなれば、（姫宮が）かくて隠れ給ひなん後はいかなる人の取り争はんとと思せば、皆聞こえおき給ふべし。（一九三頁）

そこらひろき院のうち、先坊の御心に入れてしおき給へりし池、山、遣水、木、草のもとまでも、いみじきを、さながら寝殿は堂になし給ひて、極楽のさまをあらはして、領じ給へりし所なども、三昧堂に不断念仏行はせなど、かからずは口惜しからましとぞ見えたる。（一九五頁）

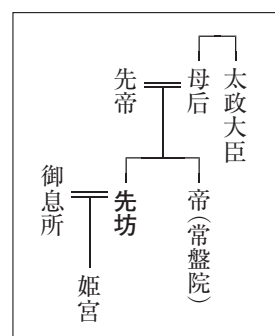
かくて、先坊の宮（姫宮）もうせ給ひぬ、（一九六頁）

この先坊は、「故太政大臣の妹に当る人が、先坊の母后になり、それは先坊と兄弟である常盤院にとつても同じ腹となる」人物であり、「故人のようであるから、春宮のまままで亡くなられた方と思われ、それで弟の今の帝が御位につかれたものと考えられる」と考察されている。

『浅茅が露』の先坊は、明確に『源氏物語』を踏襲する。太政大臣の妹を母とし、同腹の兄弟が帝位に即位した点は、『源氏物語』を介して保明親王の境涯にも一致する。このような点を重視すると、『源氏物語』の六条御息所が伊勢下向の直前に急死した場合の秋好中宮の運命が『浅茅が露』に描かれていると見ることが出来る。

同時代の『いはでしのぶ』の人物系譜にも先坊が見いだせる。

この入道式部卿の宮は、一条の院の第二の御こ、前坊とをなじ后ばらに



系図5 『浅茅が露』の先坊



をはしますぞかし。』(『いはでしのぶ』巻第二)

と、入道式部卿宮の同腹兄弟、先帝一条院の第二皇子が「前坊」と呼ばれるのである。東宮位のままに死去したことが予想され、先坊の定義に適い、『源氏物語』や『浅茅が露』から大きくは離れないと思われる。『源氏物語』等の先坊の兄弟(桐壺帝)が即位しなかった場合が創出されていたのかもしれない。

『風葉和歌集』の詞書から散逸した中世王朝物語三作品に先坊の存在が確認できる。『嘆き絶えせぬ』『御垣が原』『水のしら波』である。

十月ばかり、前坊の御服脱ぎ侍りけるに、空の気色思ひ知り

顔にうちしぐれければ 嘆き絶えせぬの麗景殿の女御

朽ち果つる袖を変へてもしぐるればいつか干すまのあらんとすらむ

(巻第九「哀傷」六四四。一四頁)

前坊の御服奉りて、思ひがけず我が御身一つに、濃き御袖の色

も、契り浅からずおぼされて 御垣が原の一条の女院

思ひきや涙のかかる藤衣我が身一つに染めんものとは

(巻第九「哀傷」六七三。三五頁)

前坊わづらひて出でさせ給ひけるに聞えさせ給ひける

水のしら浪の朱雀院御歌

年を経てのどかに照らせ雲の上に影並べつる春の夜の月

(巻第十六「雑」一一六七。二二七頁)

『嘆き絶えせぬ』には服喪期間が終了しても先坊を失った悲しみから逃れられない様が強調され、『御垣が原』には先坊の服喪に際しての嘆きの深さが描かれていたと想定できる。また、この二作には先坊の死に至る経緯、先坊の生前の姿が物語られていたと見なして大過ないであろう。『水のしら波』詠歌は先坊が罹患により宮廷から退出する際に贈られたものと思われる。先坊がこの段階では存命であったことが判明し、「雲の上に影並べつる」からは詠者の朱雀院と先坊とが兄弟であったことが推察されるのである。

『風葉集』によって先坊の存在が認定できる三物語作品には、在世中の先坊が造型され、落命の事情が描かれていた可能性が高い。先坊が実在感を伴って形象化され、作品世界で重要な役割を果たしていたからこそ、代表歌

に關与して詞書に姿を現したと考えられる。それに対して、『源氏物語』や『浅茅が露』の先坊は、死後に回想されるに終始し、物語の登場人物として活動するものではない。『風葉集』に痕跡をとどめないのも当然である。

このように考えると、先坊の存在感が鮮明な『嘆き絶えせぬ』型の散逸物語作品が他にも存在していたと類推できるだけでなく、『浅茅が露』や『いはでしのぶ』(現存部分)のように先坊が表現された作り物語は思いの外に多量に著作されていたという想像に導かれるのである。中世王朝物語には『源氏物語』に端を発した先坊が頻出する傾向があったと言えるかもしれない。しかしながら、作品世界の中心軸を左右するほどの重要性をもった先坊は見いだし難い。ここに、作り物語の先坊と歴史物語の先坊とが大同しつても小異すると言えるであろう。

その一方で、中世王朝物語、特に『浅茅が露』『いはでしのぶ』の先坊は「先坊(前坊)」以外の呼称をもたない点で歴史物語に一致する。『源氏物語』の先坊は現状では「故前坊」と称されるのを基本とし、「故宮」とも呼ばれている。六条御息所の亡父は前(先)の東宮として定位されて、固有名詞的に「前(先)坊」と呼ばれていたわけではないのである。

「先坊」は、『後撰集』『大和物語』の保明親王を源流として、『源氏物語』の世界に組み込まれ、和歌や物語にも受け継がれ、中世王朝物語に一定の存在感を示すに至ったのである。また、その先坊形成に際しては『大鏡』等の歴史物語の流れも接触し、皇位継承史の動向に關与する意味での重要性が先坊に付与されたと思われる。そうして、その両様の系流を受け止めるのが『増鏡』の先坊なのである。

## 結

東宮保明親王の早世は、引き続き慶頼王の急死と相俟って醍醐帝の皇統の持続と正統性を揺るがすものであった。即位目前の保明東宮の悲運と關係者の悲嘆は歌語りとなり、程なく編纂される『後撰集』や『大和物語』の好適な素材となって流布し、「先坊(前坊)」は個人の別称として定着するに至る。それに伴って、保明が夭折によって即位できなかったことから先坊すなわち

「夭折した東宮」を意味するようになり、それと連動して廃太子や辞退者が先坊と称されない事態になったと思われる。東宮位を退いてからも生き続けた廃坊や辞退東宮には、真如（高岳親王）・恒寂（恒貞親王）・小一条院（敦明親王）などの公式名称が発生するのに対して、生存していない夭折者には個人を特定する名称が必要なかったことも関連するかもしれない。

やがて保明親王生前の行為の叙述に際しても、「先坊」を主語として表記される事例も見られるようになる。こうして、「先坊＝保明」のイメージは定着し、『源氏物語』の先坊の典拠となり、六条御息所の物語として広範に享受され続けることになる。

また、保明親王を叙述対象とする『大鏡』では先坊の悲劇は皇位継承過程の動揺と不可分のものとして、先坊と太后の物語を導き出すのである。太后穩子によって先坊の悲劇は村上帝皇統の栄光に転ずることになる。醍醐帝皇統の危機は回避され、それと運命を共有していた藤原北家忠平流の正系化が確定し、道長栄華への道が開かれた点で『大鏡』全体の岐路にもなった。

『源氏物語』『大鏡』両作は幅広く享受され、その影響は後世に広く及び、先坊像は保持され発展させられたと思われる。藤原定家も先坊の有力な享受者の一人として流布に貢献したであろう。十二世紀末の『今鏡』においては、立坊していない敦文親王が先坊として皇位継承史の転換点に点描され、先坊と称される資格をもち、保明先坊に似た境遇の実仁親王は先坊とは認められなかった。同時代の他書には実仁を先坊と称して保明と重ね合わせる事例も確認できるが、『今鏡』の論理が敦文を選択したと推量する。系譜的構成を厳守し歴史物語（世継物語）の系流を堅持する『今鏡』の本質に基づくものと思われるからである。

十三世紀になると先坊は明確な形象を獲得し、『浅茅が露』『いはでしのぶ』などの中世王朝物語の世界で安定した存在感をもって頻出するようになったと思われる。『大和物語』や『大鏡』の保明親王と『源氏物語』の先坊とが渾然一体となり、物語世界を彩る様が散見する。散逸作品の『嘆き絶えせぬ』『御垣が原』『水のしら波』には先坊の臨終場面や人間性が描かれていた可能性さえある。

十三世紀初頭頃は歴史物語史の転機でもあり、「中世歴史物語」と呼ぶべ

き新傾向作品が連続的に著作される。そのうち『六代勝事記』では、踐祚していた仲恭帝が廢帝ではなく先坊と呼ばれる。先坊が死者にしか用いられない点で廢坊と厳然と区別されていた通例に反し、作り物語・中世王朝物語を中心に一般化していた用法にも反するものであった。ただし、皇位継承史の要諦として一定の役割を果たした形跡が認められる点で、この作品も歴史物語の系譜に属すると言える。また、『大鏡』『今鏡』『六代勝事記』『浅茅が露』の先坊が、国母（母后）を実母とし、外伯叔父に撰関職または太政大臣をもつという共通性も皇位継承史形成に関連するに違いない。

以上のように文学作品の中で築き上げられてきた先坊が『増鏡』において集約されている。作り物語の中の夭折した東宮と歴史物語の皇位継承史に組み込まれた先坊が邦良親王の悲劇に合流する。和歌文学、歌物語、作り物語、歴史物語で醸成された先坊が『増鏡』の邦良親王像に結実したとも言える。

## 注

(1) 原田芳起『先帝』名義弁証付『先坊』（同著『平安時代文学語彙の研究 続編』昭和四十八年、風間書房刊）等参照。

(2) (1)に同じ。原田芳起は、意味・用法・字音の面から「先坊」が正しく、中世の書写の間に「先坊」と「前坊」が混用されるようになったと考察する。ただし、早期の用例を現存写本で確認すると、『後撰集』（二二〇三・一四〇六）や『貞信公記』（抄本、延長二年二月八日条・同三月十五日条）には両例が併存している。

(3) 『大鏡』の本文は、橘健二・加藤静子校注・訳『大鏡』（新編日本古典文学全集34、平成八年、小学館刊）より引用し、(一)内に説明を補う。「先坊（前坊）」には傍線を施す（以下同じ）。

(4) 東宮位を辞退した敦明親王は『花鳥余情』で「前坊」の例として挙げられているが、原田芳起前掲論文（1）により誤りと判定されている。同親王は辞退後に「小一条院」と尊称されるので、前の東宮として認識される必要はない。

(5) 『本朝世紀』天慶八年（九四五）十二月十九日条には、保明親王が「先々坊」と称される部分がある（『本朝世紀』新訂増補国史大系第九

卷、吉川弘文館刊、一二〇頁）が、これは慶頼王が「先坊」であったことに基づく。

『保明親王帯刀陣歌合』（尊経閣文庫蔵本）の冒頭に、「前前坊のたちはきばらあきのものどもをよみてあはせける」と記される。歌合は、保明東宮時代の延喜四〜二十三年（九〇四〜九二二）に行われ、「前前坊」の部分は慶頼王没年の延長三年（九二五）以降に記されたことになる。底本では「いつれのみやのかあらむうたあはせしたまひける」を抹消し、「前前坊」云々と改めている（杉谷寿郎・新編国歌大観解題）。目録に「前々坊帯刀陣歌合秋景物」とある（同）。

(6) 高橋正治校注・訳「大和物語」『竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』新編日本古典文学全集12、平成六年、小学館刊。二五八頁。

(7) 「昔物語」三八四〜三八五頁。

(8) 拙稿『大鏡』における藤原忠平の栄華」『日本文芸論稿』第十二・十三合併号、昭和五十八年七月）、同『大鏡』の構想と皇位継承過程―「正統」の確定と顕在化―（『島大國文』第十七号、昭和六十三年十一月）など参照。

(9) 『後撰集』でも次のように、『大和物語』と同じく大輔が保明先坊の死を悼む（片桐洋一校注『後撰和歌集』新日本古典文学大系6、平成二年、岩波書店刊。三六三頁、四二八頁）。

前坊（保明）おはしまさずなりての頃、五節の師のもとにつかはしける  
大輔

うけれども悲き物をひたぶるに我をや人の思捨つらん（巻第十七雑三二二〇三三）

先坊（保明）うせたまひての春、大輔につかはしける  
玄上の朝臣のむすめ

あらたまの年越え来らし常もなき初鶯の音にぞなかる、（巻第二十慶賀哀傷 一四〇六）

(10) たとえば、本橋裕美「六条御息所を支える『虚構』―（中将御息所）という準拠の方法―」（『日本文学』第六十一巻第一号、平成二十四年一月）は、『大鏡』時平伝では「先坊」妃としての中將御息所は藤原忠平

女貴子であるが、それに同じく忠平女で斎宮女御の母である寛子、先坊の死を悲しんで詠歌する玄上女とが統合されていると説き、この虚構の存在と言える中将御息所が古注を介して六条御息所の準拠となると指摘する。この六条御息所が先坊御息所として作り物語だけでなく、後代の歴史物語に影響を及ぼしたことは否定できないであろう。このように、『源氏物語』と歴史叙述、作り物語と歴史物語とは相互に干渉しつつ先坊を取用したものと思われる。

(11) 『今鏡』の本文は、竹鼻績訳注『今鏡』上・中・下（講談社学術文庫、昭和五十九年刊）により、（ ）内に説明等を補足する。以下、本書を『全訳注』と略記する。

(12) 板垣倫行校註『今鏡』（日本古典全書、昭和二十五年、朝日新聞社刊）において、「御子たち第八『腹々の御子』の「一の宮」に「前坊敦文親王」と注記されている。しかし、ここは元服の先例として一の宮の着衣が取り上げられる部分なので、夭折して元服していない敦文ではあり得ない。増淵勝一「今鏡人名考説」（『平安朝文学研究』第三巻第三号、昭和四十七年八月）は、敦文を否定して実質上の第一皇子である堀河帝を該当させた。海野泰男著『今鏡全釈』（昭和五十八年、福武書院刊。以下『全釈』と略す）では、堀河帝の元服が親王の時ではないことから、事例として相応しい崇徳院の「一の宮」重仁親王のことと解釈される（下・三四二頁）。『全訳注』にもほぼ同様の見解が示され、河北騰著『今鏡全注釈』（平成二十五年、笠間書院刊。以下『全注釈』と略す）にも「ここは、白河院の一宮敦文でなく、崇徳院の一宮重仁親王であろう」と踏襲される（五九〇頁）。以上のように「一の宮」を敦文の呼称と見ることはできない。

(13) 海野泰男著『全釈』上・二〇七頁。

(14) 関根正直著『今鏡新註』（昭和二年、六合館刊）、黒板勝美編『今鏡増鏡』（新訂増補国史大系第二十一巻下、昭和十五年、吉川弘文館刊）等には、「前坊」に「敦文親王」「敦文」と傍記されるのみである。『全訳注』には「第一皇子敦文親王をさすが、敦文親王は立坊することなく四歳で夭折した」と記され（上・三三五頁）、『全注釈』には「第一皇

子敦文親王。夭折して皇太子にはなっていない」と注されるに過ぎない(五九〇頁)。なお、⑥についても『全釈』『全訳注』『全注釈』ともに⑤と同一に解釈されている。

(15) 『栄花物語』本文は、山中裕他校注・訳『栄花物語』①②③(新編日本古典文学全集31～33、平成七・九十年、小学館刊)より引用し、( )内に説明を補う。

(16) 拙稿『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華―残映としての『大鏡』―(『島大國文』第十八号、平成元年十一月)、『歴史物語の範囲と系列』(上)(『島根大学教育学部紀要』第二十七卷第一号、平成五年十二月)など参照。

(17) 鈴木徳男著『統詞花和歌集新注上』(新注和歌文学叢書7、平成二十二年、青簡舎刊)三二四頁。

(18) 『統詞花集』『今鏡』ともに、続いて常陸の乳母の返歌が収められている。

(19) 『新統古今和歌集』巻第十六「哀傷歌」一五六〇には、行尊の贈歌が省略されて常陸の乳母の答歌のみが引かれているが、その詞書に「白河院の御子春宮かくれさせ給うて」とある。実仁は白河院の弟で皇子ではなく、敦文は皇子なので、両親王が混同されている事例となる。しかし、成立時期が永享十一年(一四三九)と詠時から遠く離れるため『統詞花集』『今鏡』とは事情を異にすると思なした。

(20) 『増鏡』の本文は、時枝誠記・木藤才蔵校注『増鏡』(『神皇正統記増鏡』日本古典文学大系87、昭和四十年、岩波書店刊)により、適宜( )内に説明を補う。

(21) 『大鏡』の太后は作品世界を統御する第一の国母という意味になると思われるが、『増鏡』の場合は朱雀・村上両帝の母后(皇太后・太皇太后)の意味しかもたない。

(22) 生前の邦良親王は一貫して「春宮」と呼ばれ(六例)、死没と同時に「先坊(前坊)」に統一される。

(23) 「前稿」参照。

(24) 拙稿『増鏡』の基調―二家系対照と明暗循環の構図―(『文芸研究』

第一二八集、平成三年九月)、同『増鏡』の構想に関する一考察―同趣象の反復と明暗反転―(『菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流』平成六年、おうふう刊)など参照。

(25) 康仁親王は廃坊であって、東宮位で死去したのではないので先坊には該当しない。

(26) 「前稿」では以下のように述べた。

『増鏡』においても、「先坊」は「夭折した東宮」と同義であった。光厳帝が踐祚した後に遺児康仁親王が立坊する際にも邦良親王が「先坊」と呼ばれているので(第十五「むら時雨」四五五頁)、「一代前の東宮」の意で「先坊」が用いられているとは思えない。光厳朝にあつては、邦良は二代前の東宮だからである。また、「先例」としての保明親王の存在感を見ると、「先坊」邦良は「夭折した東宮」としてのみ『増鏡』世界に存立が許されると言えるであろう。

(27) 『藤葉和歌集』の本文と成立時期は、デジタル版国歌大観によつた。以下に取り上げる『兼好法師集』『草庵和歌集』『新拾遺和歌集』『新後拾遺和歌集』についても同じ。

(28) 頼阿作『草庵和歌集』は延文四・五年(一三五九・一三六〇)頃成立と言われる。二条為明撰の『新拾遺和歌集』は為明死後の貞治三年(一三六四)十一月に頼阿が完成した。

(29) 『新後拾遺和歌集』は永徳三年(一二八三)成立で、二条良基の序が含まれる。

(30) 『増鏡』の成立時期推定については、拙稿『増鏡』(『日本古典文学研究史大事典』平成九年、勉誠社刊)など参照。

(31) 拙稿『増鏡』と両統問題(『島根大学教育学部紀要』第二十五巻、平成三年十二月)・『増鏡』の予言記事をめぐって(『島根大学教育学部紀要』第二十六巻、平成四年十二月)等参照。

(32) 拙稿『池の藻屑』研究序説―歴史物語の系列化と枠物語構想―(『島大國文』第三十四号、平成二十六年一月)、同『歴史物語の基軸』としての「世継三作」―「先坊」の設定とその継承をめぐって―(『王

- 朝歴史物語史の構想と展望』平成二十七年、新典社刊）など参照。
- (33) 『六代勝事記』本文は、弓削繁校注『六代勝事記・五代帝王物語』（中世の文学、平成十二年、三弥井書店刊）により、（一）に説明を補う。
- (34) 原田芳起前掲論文（一）、藤本勝義「源氏物語『前坊』故父大臣の御霊」致（『日本文学』第三十二卷第八号、昭和五十八年八月。同著『源氏物語の想像力—史実と虚構—』（平成六年、笠間書院刊）に再録）、同「源氏物語に於ける前坊をめぐる」（『文学・語学』第八十八号、昭和五十五年十月。同著前掲書に再録）など参照。
- (35) 廢坊説は、比較的最近にも、本多美奈子「前坊の御息所論」（『立教大学日本文学』第七十四号、平成七年七月）、望月郁子「前坊」廢太子」（『二松学舎大学人文論叢』第六十三輯、平成十一年十月）、石川倫子「源氏物語』の前坊—桐壺帝の弟宮—」（金沢工業大学日本文学研究『日本文学研究』第十三号、平成二十二年一月）などに説かれる。
- (36) 前掲拙稿（32）参照。
- (37) 『浅茅が露』の本文は、鈴木一雄・伊藤博・石椋敬子校訂・訳注「浅茅が露」（『あきぎり浅茅が露』中世王朝物語全集1、平成十一年、笠間書院刊）により、（一）に適宜説明を補う。
- (38) 大槻脩著『あさぢが露の研究』（昭和四十九年、桜楓社刊）五四頁頭注、同著『あさぢが露』（昭和五十年、桜楓社刊）五四頁頭注。
- (39) 小木喬著『鎌倉時代物語の研究』（昭和三十六年、東宝書房刊。昭和五十九年、有精堂復刊）一一九頁。
- (40) 小木喬著『いはでしのぶ物語本文と研究』（昭和五十二年、笠間書院刊）二七九・二八〇頁。
- (41) 小木喬著前掲書（40）には、「白河院の前に春宮であったのか、白河院時代に春宮であったのかも不明。いずれにしても春宮のままで薨ぜられたようである」と推定される。
- (42) 『源氏物語』『浅茅が露』『いはでしのぶ』に関する考察については、拙著『歴史物語と物語文学の相関に関する研究』（平成6～8年度科学研究費補助金基盤研究C）研究成果報告書、平成九年三月刊）の「物語文学史の中の『先坊』」八二・八三頁と重複する部分がある。
- (43) 『風葉和歌集』は、樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選（下）』（岩波文庫、平成元年刊）より引用する。以下同じ。
- (44) 『嘆き絶えせぬ』の先坊の死は、「嘆き絶えせぬ」主想の一翼を担うものと思われるが、作品全体の中心にあったとまでは言えない。
- (45) 『源氏物語』の先坊は以下のように呼ばれる（阿部秋生他校注・訳『源氏物語』②③④）へ新編日本古典文学全集21～23、平成七・八年、小学館刊）による。
- まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にみたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。（『葵』、②一八頁）
- 院（桐壺院）にもいかに思さむ、故前坊の同じき御はらからといふ中にも、いみじう思ひかはしきこえさせたまひて、…（同、②五三頁）
- 十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。（『賢木』、②九三頁）
- 八月は故前坊の御忌月なれば、（『野わき』、③二六三頁）
- 装束限りなくきよらを尽くして、名高き帯、御佩刀など、故前坊の御方さまにて伝はりまありたるも、またあはれになむ。（『若菜上』、④九八頁）